

日本文學聯誼第五卷（明治篇）

昭和八年九月一日印刷
昭和八年九月五日發行

定價金四圓五十錢

代著者 藤村作

發行者 矢島一三

印刷者 兒玉豐

印刷所 精興社印刷所

發行所

東京市神田區表神保町八番地
中興

電話
東京市神田區
四一三三號



序

日本文學聯講明治篇の出版は、はやく一年前にあるべきものであつたが、色々な事情に支へられて、とう／＼今日に及んだ。これについて編者は遺憾をおぼえてゐるのは言ふまでもなく、二重の重い責任を感じてゐる。一つは大方の讀者諸君の期待に背いて、空しく一年を經過し來つたこと。今一つは早く執筆を了せられた筆者諸君の折角苦心の結果を、暫くでも世間の耳目の外に埋沒せしめたこと。この二つの事に關して、編者はこゝに謹んで陳謝する。併し幸に、今明治文學研究の機運漸く起り、著書に、雜誌に、學校敎壇に、公開講堂に、明治文學の聲を聴くことの多くなつて來た際に、豫期以上の大冊を以て、本聯講の出版を完成し得たことを、余はせめてもの欣幸とするのである。

顧みれば、本聯講はこれを國文學の研究としては、方法に統一を缺き、又國文學史としては、我が國文學の全領域を盡くし得てゐない。これは當初より豫期されたことでもあり、又避けられない弱點でもある。併しながら、當初からラヂオ放送の目的に向つて出發したものであるから、この種の書としては、最も多數の讀者の要求に應ぜんとする用意を有したものであるといふ點に於て、本書は今の學界に占め得べき特殊な地位を有することを信ずるものである。

編 者

日本文學聯講

第五卷
明治篇

目次

一、明治文學の概観…………… 齋藤清衛…………… 一

明治文化と明治文學…………… 一

明治文學を種別より觀て…………… 六

一、評論——二、小説——三、詩歌——四、戯曲……………

明治文學思潮の主流…………… 一〇

一、混沌未分の時代——二、試練對立の時代——三、自覺達成の時代……………

結 論…………… 三

三、明治和歌史序說…………… 相原弘…………… 三

一、序——二、御維新の歌人——三、景樹系統の歌人（その一）——四、學者中の歌人（その二）……………

五、岸本由豆流系統の歌人——六、本居大平系統の歌人——七、

橋守部系統の歌人——八、小山田與清系統の歌人——九、御歌所及び宮廷歌人——一〇、明治天皇昭憲皇太后——一一、景樹系統の歌人（その二）——一二、足

代弘訓系統の歌人——一三、學者中の歌人（その二）——一四、景樹系統の歌人（そ

の三)——一五、民間女流歌人——一六、萬葉派歌人——一七、新題和歌——一八、

結語

三、新派勃興以後の明治の和歌……………久松潜一……………七

一、序説——二、落合直文の和歌革新——三、明星派の短歌——四、寫實主義
の短歌

四、明治の俳句……………松岡滿夫……………七

一、舊派の諸相と俳句の革新……………七

二、子規の全貌……………八

三、日本派の俳句と調和派の俳句……………九

四、新傾向句運動の勃興……………一〇

五、新體詩變遷の展望……………湯地孝……………一三

序 言……………一二

第一 新體詩の成生……………一四

一、新詩歌の出現——二、新詩壇の進出

第二 浪漫抒情派の興隆……………一七

一、抒情詩樹立への過程——二、浪漫派巨星の功業——三、諸流の群起

第三 輓近體への進展

一、象徵思潮の浸潤——二、自由詩派の擡頭

第四 頽唐詩風の横流

一、享樂詩體の盛行——二、象徵後期の流風

六 硯友社以前の小説

藤村 作 三七

一、外來精神と翻譯文學

二、國家意識の勃興と愛國文學の出現

三、新寫實主義の提唱と其の出現

七 硯友社派文學の展開

北澤喜代治 三五

創始時代

一、我樂多文庫——二、二人比丘尼色懺悔——三、言文一致體と硯友社派——四、西鶴復活と紅葉——五、紅葉以外の社中

發展時代

一、日清戰爭と硯友社派——二、觀念小説と眉山・鏡花——三、柳浪の深刻小説——四、「裏表」以後の眉山——五、紅葉その他

八 硯友社以後の小説……………形田藤太……………三七

序……………三七

一、前期小説界の概観……………三〇

二、戦後に於ける一般思想界の推移……………三三

イ、國民的自覺と現實主義——ロ、日本主義的思想——ハ、個人主義的思想——ニ、美的生活論——ホ、社會主義的思想——ヘ、宗教的傾向——ト、前期自然主義的思想

三、戦後の文藝思潮界……………三六

イ、文學の社會的誕生時代——ロ、國民的文學の主張——ハ、社會意識の覺醒と文學——ニ、時代精神論と後期寫實主義——ホ、寫實主義の轉向と前期自然主義

九 自然主義の小説……………鹽田良平……………三八

第一節 自然主義の名稱由來……………三八

第二節 寫實主義と自然主義……………三九

第三節 自然主義作品(一)……………四〇

一、島崎藤村——二、國木田獨步——三、田山花袋

第四節 自然主義作品(二)……………四四

一、正宗白鳥——二、岩野泡鳴——三、徳田秋聲——四、小杉天外・小栗風葉・二葉亭四迷

——五、其の他の作家群

第五節 結 論……………四九二

二〇、明治歌舞伎……………守隨憲治……………四九七

第一 新派劇……………四九八

一、誕生期——二、發達期——三、完成期

第二 新派劇の脚本……………五〇八

一、書生芝居の時代の作——二、新派劇時代の作

第三 舊派劇……………五三

一、劇場の新運動——二、劇壇の新人——三、新史劇・新樂劇の提唱

第四 舊派劇の脚本……………五三

一、高踏派——二、現實派——三、漸進派——四、新舞踊劇

二、新劇の世界——主として第一期と呼ぶべき時代の考察……………舟橋聖一……………五四九

第一章 新劇前派……………五五

翻譯劇——「自由太刀餘波銳鋒」——「演劇改良論者の偏見に驚く」——「折薔薇」——新派

春の屋主人——「松葉惡源太」——「ハムレット」——「オセロ」と川上——「玉簫兩浦嶼」

——「日蓮聖人辻説法」——「新曲浦島」——小山内薫

第二章 文藝協會……………五〇

明治三十九年といふ年——文藝協會發會式——若葉會文士劇——岡本綺堂——英語劇「シーザー」——春曙の公子ハムレット——島村抱月——ノラと松井須磨子——山崎紫紅——岩野泡鳴——泡鳴の「煙の舌」——佐野天聲と眞山青果——木下・吉井・秋田の新人連——文藝協會の「故郷」——須磨子のマゲダ——第四回公演「二十世紀」——第五回公演「アルト・ハイデルベルヒ」——第六回公演「ジュリアス・シーザー」——文藝協會の分裂

第三章 自由劇場

イ、松居松葉と左團次

市川左團次の經歷——松葉と先代左團次——左團次・松葉の渡歐——明治座の改革——「エニスの商人」

ロ、小山内薫と左團次

小山内薫の經歷——雅友劇友のはなし——東京俳優養成所

ハ、自由劇場の計畫

翻譯劇と創作劇——築地小劇場當初の問題——演劇新潮合評會——職業俳優の是非

ニ、第一回公演とイブセン

「ボルクマン」の上演——鷗外の翻譯——現下新劇萎微の原因

ホ、第二回と第三回

「出發前半時間」其の他——「夜の宿」の成功——「休みの日」の話

ヘ、新時代劇協會

井上正夫——左團次の「ベルス」——舊劇に於ける左團次

ト、その後の自由劇場……………

五九五

第四回公演——第五回公演「寂しき人々」——土曜劇場のはなし——猿之助の吾聲會

——第六回自由劇場——左團次の「犠牲」——小山内薫の渡歐

第四章 近代劇協會と藝術座

五九九

イ、近代劇協會と公衆劇團……………

五九九

上山草人——「ヘッダ・ガブレ」——とりで社——基礎工事——「ファウスト」の成功——

「マクベス」——公衆劇團……………

ロ、藝術座……………

六〇三

第一回公演——「サロメ」の成功——「海の夫人」——抱月と藝術俱樂部——二元の道

——「復活」——澤田正二郎の脱退——須磨子によるスターシステム——「クレオパ

トラ」——中村吉藏の作品——闇の力の好評——「生ける屍」の失敗——「死と其の前後」

——「緑の朝」——抱月の死——須磨子の死——消滅——中山歌子——水谷八重子

ハ、舞臺協會の初期……………

六一

ニ、無名會のレパトリイ……………

六一

ホ、自由劇場の消滅……………

六二

新歸朝の小山内薫——「夜の宿再演」——「星の世界へ」——「信仰」——没落の原因と結果

ヘ、新劇場……………

六二

ト、第一期運動の終熄……………

六二

三、明治文學評論の展開……………久松潜一……六七

序 說 文學評論の性質……………六七

第一章 文學評論の黎明……………六九

一、明治初期の一般傾向——二、功利的文學論と美學——三、素材の尊重論

第二章 文學評論の成立……………六九

一、文學の要素論……………六九

一、石橋忍月の立場——二、幽玄論——三、罪過論と運命論

二、浪漫主義の文學論……………六四〇

一、浪漫主義の意味——二、内部生命と靈感

三、戲曲論の發達……………六四八

一、演劇改良論——二、史劇論

第三章 文學評論の展開……………六五五

一、浪漫主義的文學論の衰退……………六五五

一、浪漫主義的文學論——二、日本主義とニイチエ・日蓮——三、樗牛の文學評論

二、自然主義的文學論の成立……………六六二

一、自然主義的文學論——二、自然主義論——三、自然主義的文學論の發展

三、反自然主義的文學論……………六七九

一、反自然主義——二、非自然主義の理論——三、非人情・則天去私と文學論の意味

明治文學の概観

齋 藤 清 衛

明治文化と明治文學

一つの文化と云ふものが顯現するには、様々の分野が存するのであつて、著しいものを算へて見ても、政治・經濟・教育・宗教、それから藝術と云ふ様に、随分、違つた方面がその中に含まれてきてゐる。従つて、春、木の芽が張り出る様に、こちらからもあちらからも、競つてぐんぐ伸び出してくるそれら各々の過程を觀察すると、やはり、總てが、いつも同一の歩み、同一の調子と云ふわけには行きかねる。その發生上には第一、素質的、本質的の相違といふものが横つてゐる。例へば、チリップの芽生に比して、パンジーの生長が早いと云ふのは、各植物がそれぐに持つ宿命である。政治的革命が斷行されても、直に、新法令や新教育令が實施されるかと云ふに、なか／＼さうは行かぬ。此は組織的形式的性質のものとして、法令などが時代に先行すると云ふこと、そのことが、困難といふ理由からであらう。また等しく、藝術と云つても、聽覺藝術の方が視覺藝術に較べて、兎もすれば、先行する素質を示してゐる。文學の普及にしても先づ國民教育の發達と云ふことを前程とするだけに、常に讀者層を無視して考察することを許されないのである。

個々の歩調の相違してくる理由として、次に文化の特質と云ふことが考へられる。一口に、文化とか文明とか

云つても、時處を異にすると、その内容には雲泥の差別が存してくる。文化を生み出した社會や團體の有つ特質と云ふものが、しつかと、それを決定づけるからである。文化の發達と云ふことは、要するに、その團體的個の充全の發展を意味するものであつて、個人に就て云へば、遺憾なくその天稟個性を發揮し得た成人の狀態のやうなものである。そこで、均等調和を獲ることをその理想とはしてゐても、或る文化はその政治・教育方面に於て特色あるに對し、他の文化は宗教・藝術の方面に光つてゐると云ふ如き實例は、史上、決して珍しくないのである。かくてこの方面の展開は、素質的理由とは、全然離れて行はれることとなる。

最後に、發達の遲速に關する事由として、文化發展の外的關係と云ふものを無視することが出来ない。文化の芽生には冬を過して春を迎へる草木の様に、極めて順當に自然な狀態に於て伸び出る場合のものもあるにはあるが、別に偶然的機縁に基く場合のものも尠くない。外國文化の輸入に依る刺戟の如きは、その最も著しい例で、時にはそれも、たゞの模倣に止まつて、遂に完全の文化となり得なかつたと云ふことも生じ得るであらう。輸入文化の受納法、その咀嚼法の中に、自づから、一國文化の特質が映し出されることは申すまでもない。

さて、話を戻して、藝術中の文學と云ふ一分野にのみつき、その、文化との關係を見るに、文學の隆運が、一文化成立の魁をなしたことは、世界文化史上その例に乏しくない。その場合、文學はいかにも、勇敢な進軍ラッパ手の様な姿であつた。總て新しいものが生れるためには、醇真なる熱情が翹望される。殊に、近世浪漫主義文化の前衛として、かのルーソーの奏した劉曉たる行進曲は、文化發生に關ぐことを許されぬ程、重大なものであつた。

しかし、文學の圓熟が、一般文化的現象に比して、甚だしく遅れると云ふことも珍らしくない。政治や經濟方面の活動が、餘りに潑刺としてゐる場合、乃至、功利的精神の甚だしく濃厚の場合、そんな様な情勢に於ては、

文學などと云ふものは、とかく、隅っこへ押しやられてしまふ。世が泰平になり、人々の餘裕が出来てこそ、初めて文學が榮えるものだと言ふ類の考へ方は、今でも我が國民の間に根づよく行き亘つてゐる。特に、どうかすると、「歌なんて閑人の業さ、」と言ふ様に思ひ込んでしまふ傾向すらが多い。

さて、こゝまで來て、「明治文學」と云ふ言葉を更に吟味し返して見よう。

歷史上、年號を取出して何々時代と云ふことは可なり便宜の方法であり、明治時代と云ふ用語、次いでは明治文學と云ふ類の言葉なども、いつか、通りの言葉になつてしまつてゐる。改元と云ふことは、いかにも、政治關係の深い場合が多いから、政治上ではこれも比類ない時代區分の一便法であるとしてよからう。が、藝術史上に於ては、惜しいことにそこが一概に行きかねるのである。明治文學と云へば、明治四十五年間の文學を指したまでで、それだけで宜いではないかと云ふ人も出て來ようけれど、文學史觀からして、そんな無稽はどうしても許しかねる。そこで、問題は、文藝思潮とか藝術主義とか云ふ範疇に收めて、綜合的發展的礎石の上に總てを移されねばならぬこととなる。

明治時代に於て、新文學の曙光は、政治や經濟的活動に比して遙に遅れてしまつた。即ち、わが國に於て、文學は因襲的に遊戲的餘裕的產物と考へられ、明治の初年功利思想が旺盛であつたのみならず、歐米文明との接觸によつて覺醒せしめられた維新の日本は、物質的方面に先づ、その主力を注ぐ様に、餘儀なくされてゐたからである。

そこで、明治文學と云つても、前に十六七箇年の近世文學終焉時代、乃至混沌期時代がある爲に、その長さは僅かその残りの二十數年の年數を算し得るに過ぎない。而もその最初の峠が、明治四十年頃に當り、残り四五年は大正で達成された文學の序幕をなし得たに過ぎない結果、その大半は全くの試練時代に終つたものと云ふに憚

らないのである。

一大國文學史潮に於ける試練の時代、摸索の時代が、それは同時に正しく自己を見詰めてのルネエサンスの準備時代でもあつたのである。爲にまた、見方に依つては、非常に興趣に富んでゐる時期であるとも云へる。即ち、政治・經濟・教育、——何れもが殆どその着くべき位置につき、その探るべき形態組織^{オグニゼーション}を定め得た時に、文學だけは、全くの迷ひ子に過ぎなかつた。可哀さうな程に無智幼弱の生立であつた。しかし、それだけ自由發展の境地が残され、未知數であつたといふところに多くの興味が添うてくる。ともあれ、それは將來、科學的自然主義を平氣で乗越す様な曲藝の修業中であつたのだつた。歐米に於て一世紀を要した獲得を、僅か二三十年間で我物にしようといふ努力準備の眞最中であつたのだつた。

更に、明治文學を考へるもの、その間に勃發した二大戦役と文學との相關する點を度外視することが出来ぬ。文學史からのみ見ても、日清・日露といふ此の兩役が跡付けていつた線は、可なりに大きいのである。尤もこの現象には、時代の思潮の投影の外に、文學自體の發展が必然的に齎した別の要素も籠つてゐる。が、日清戦争直後の病的な浪漫的思想には、世相に對し文學が、切つても切れぬ關係を持つてゐる。緊張の弛緩から來る反省の餘裕と云ふものは、とかく精神の深刻化、劇化の足跡をつけてゆくのを恒とするが、まさしく兩戦役後の状態がさうであつた。寫實主義や自然主義の思潮が戦後殊更目立つて來たのは、必ずしも偶然でない。

更に、明治文學の流を辿らうとするものは、各時期々々に於ける教育の普及・讀者層の推移と云ふことを無視してはならない。大衆的勢力が、つねに一國文學展開の上に、或る點までの方向を規定してゆくといふことは勿論のこととして、明治文化に於ける如く、新教育令施行と共に、讀者層の上に急激の變化が將來され、それが一々鮮明な影を文學の流の上に投じてゆくと云ふ様な光景は、さう史上ありふれて見られるところの事實ではない。